

## 基調講演「頭脳を育てる環境づくり」

～育つ環境に動物飼育体験を用意するために～

中川 美穂子

### 1 獣医師が学校に関わった理由

1980年代初め、長女が小学生だったころ、私の動物病院に近くの小学校から飼育の子が必要な顔をして瀕死のウサギを抱えて飛び込んできたことがあった。その全身かまれ傷でぼろぼろになったウサギは、診察台に載せる間もなく死んでしまった。聞けば数日前から具合が悪く、教師にお願いしたが、先生方はウサギを箱に入れて教員室に引き取ったけど、一向に病院にかけようとなかった。子どもは心配で毎日覗きに行き、「今日、医者にかけなければ死んでしまう」と思い、教師に黙って来院したのである。私は子を持つ母親として悲しかった。その子の辛い顔はいまでも忘ることはできない。当時、大方の獣医師会の仲間が同じような経験を持っており、いくら無料診療で応じても同じことが繰り返されるため、みな「学校では動物を飼わないで欲しい」と、憤っていた。しかし、同時に私たちは自分の子のためには動物がいたほうが良いと確信していた。またあちこちの動物病院で捨て猫や捨て犬の「里親募集」をしていたが、動物を泣いて欲しがるわが子を無情にも罵倒して拒否する親をたくさん見ていた。それで、やはり学校には動物が必要なのだろうと考え、それならなるべく良い飼育になるように支援しようと考えたのである。

それで、私たち東京都獣医師会北多摩支部内で管内の保谷、田無、小平、東久留米、東村山、清瀬の6市から担当者を募り（学校）動物部会を結成して対策を検討した。そして82年秋に、「学校の飼育の問題について、支部員が相談を受ける。手術など特殊事例以外は費用はかかるないので気軽に活用して欲しい」と支部内6市の教育委員会にそれぞれの担当者が案内した。また、飼育法や動物のエピソードに関する小冊子「動物通信」を作り「無料相談票」とともに、各教育委員会に全公立小学校に毎学期配布してもらった。全会員の病院が相談窓口になつたのである。つまり私たちは、獣医師の助けが小

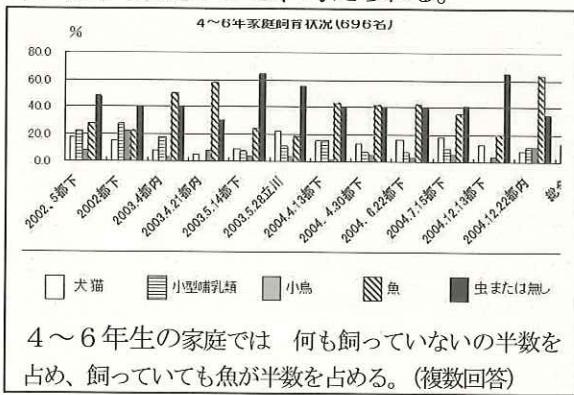
学校には必要だろうと考え、親として子どもたちに辛い思いをさせないように、また弱者の象徴である動物に情をかけて優しく対応するような大人の姿を見せられるように支援したいと思ったのである。この動物通信は毎学期学校に配布され27巻になった8年後、生活科が導入されることもあって、旧保谷市教育委員会が保谷獣医師会に「公立小学校の飼育動物に関して治療と飼育指導の委託事業」を委託するにいたった。これが飼育指導を含んだ最初の委託事業になっている。その後開業の獣医師会員の組織である日本小動物獣医師会がH10年より文部科学省の指導官方の協力を得て各地に広げる活動をしてきた。あれからほぼ28年になるが、現在はこの「地域獣医師会が学校の動物飼育教育を支援する」体制は全国29県に広がっており、各地の獣医師会から、「学校獣医師」の支援で行われる動物と子どもたちとの交流の事例が報告されてくる。

しかし、この28年間学校に関わってきて、つくづく思うのは、学校の先生方が考える飼育体験の教育的意義と私たち獣医師が考える動物飼育体験の意義にギャップがあるということであった。多くの先生は丁寧な飼育の必要性を認めていないように思える。それで長い間培ってきた獣医師の考え方人と動物の関係に関する研究者の考える「動物の子どもへの教育的影響」についておしらせしたい。

### 2 飼育体験の教育的意義

生まれたばかりの幼な子がだんだんに周りの世界に気づき関わりを持ち、やがて自分も世界の一部だと知っていくのが成長だといえるが、青少年白書によれば最近の青少年の問題行動は、人と関わらない（コミュニケーションが不得意）・自己中心的である（他への共感が育っていない）・命が分からぬ（人を殺しても改悛の情を示さない）の3点とだと言われ、自分を取り巻く世界への愛情と共感が培われていないのでは、と危惧されている。

人も動物の一種だが、子どもたちに自他への愛情と共感を培うには、子どもたちに様々な「人間を含めた生き物の営み」に接しさせ、自分以外の「他」の世界を見せる必要がある。しかし、生活スタイルが変わってきた現在、その関わりを大人が子どもに意図して与えなければ、子どもたちは動物とのかかわりを持たないまま大人になる時代になったと言える。そしてまた次世代を育てる親になるのだが、近頃は紙おむつの使用もあって、自分の子どもの便の状態も確かめない親も出てきたとか。動物としての子どもが、体や心が健康に保つために発している、言葉ではない要求を受け止められない親が出てきており、それが幼児虐待の一因になっているのではないかと、考えられる。



### 3 子どもと動物

「遊びをせんとや生まれけむ」との言葉が示すとおり、古来子どもたちは自然や人などと戯れながら育ってきたが、その自然界の様々な刺激の中でも、幼い子たちは「自力で勝手に動きまわる小さい動物たち」に惹かれ、遊びの中でその生き物に働きかけ、五感を通じて得られる反応に感動しながら動きや形や生活を記憶してきた。動物たちは子どもの心に直接働きかけ、大人の思惑を超えて大きな働きをするが、このような体験をともなった記憶は知恵となり、人格を培い、また後に教科書で習う事柄を理解できる基礎を作るといわれている。

幼い子どもたちの対象は、小さい昆虫が多く、毎日いろいろな虫たちを捕まえて、自慢げに見せてくれる。もしも大人が虫たちを嫌いでも、そのときは子どもたちの興味を大事にして一緒に楽しむことが必要だろう。子供たちが、虫とのつきあいに少々不安を持っていても、周りの大人の同意があれば安心して動物を良く見て楽しみ、生物学的な興味まで抱くことができる。この体験は、自然への入り口、科学への入り口になるだろう。また大人が、子どもと一緒に

にその動物を飼育しようと努力することで、子どもに大人への信頼を培い、継続的に様々な刺激を効果的に与えることができる。それは子どもたちの科学する心を育てる助けになれるだろう。

また、他への共感つまりあいての考え方を洞察して対応する「思いやりの心」は、ほぼシングルエージの時代までに体験してきた「人や動物とのかかわりが大きく影響する」といわれている。たとえば、口も利けない1歳の子でも、はじめて出会った猫を強くつかみ、逃げられたり反撃されているうちに、直ぐに猫の目つき、しぐさでその気分を察することができるようになる。そして数日後には猫が嫌がらない手加減を学習し、優しく撫ぜるなど動物を庇う行動をとれるようになり、動物もなつてくる。

特にホワホワの毛と丸い目を持っている小型哺乳類は、子どもにさわりたいとの気持ちをいだかせるほど魅力的で、大人が悪印象を与えるしなければ子どもは何度でもめげずに接触を試みていき、自然に付き合い方を覚え、思いやり、庇うこころ、気遣いなどを培うことができる。これらは、幸せに生きていくための大変な人の土台・資質であろう。

### 4 情のある継続飼育の意義

丁寧な動物との関わりで得られる効果は多様だが、特に目立つものは下の通りである。

- (1) 接触で五感を育てる・・感性を豊かにする
- (2) 命の大切さを学ばせる・・死の実感・悲しみ 生命尊重 死の準備教育
- (3) 愛する心の育成をはかる・・情愛教育・人の土台づくり・感受性を養う
- (4) 人を思いやる心を養う・・共感・協力・責任感・労働の意味と苦労と喜びを知る
- (5) 動物への興味を養う・・知識欲の刺激
- (6) 觀察力 洞察力 生物理解 科学への入り口
- (7) 生きる力を養う・・ハピニングへの対応

- 工夫 判断力 決断力 冷静な視点
- (7) 育児擬似体験・・小さく頼りないので自我がある
  - 思ひ通りにならないが、育てる喜び
  - (8) 緊張を緩める・・癒し 人間関係改善
  - 男女間コミュニケーション訓練
  - (9) 動物への接し方に子どもの心が表れる・・いじめる子はストレスなどを抱えている

以上の動物の意義のうち1~7は、動物を可愛いと思いながら長く付き合って始めて得られる効果である。自分に関わりのない動物が校舎から離れた小屋の中でいくら息絶えても、だれも悲しむことはなく、その死が「命の大事さ」

を気づかせることはできない。しかし毎日の世話をするうちに動物になつかれて、情が湧いて可愛いくなれば、その言葉をもたない動物が何を喜ぶかを一生懸命考えて付き合うようになり、死なれたら悲しいし、悔しく、死を惜しむことができる。また、目やしぐさを見つめたりスキンシップをしたりして動物の気持ちを推し量る訓練が、人との付き合いでも相手の気持ちを思いやる力を養う。

欧米の「人と動物の関係に関する会議」では、子どもは動物の健康を気遣って世話をしているうちに、なつかれて可愛くなり、動物から頼りにされている自分の役割の大しさに気づき、そのことで自尊心をえて、周りの関係も改善されると報告されている。子どもたちは、世話は面倒でも動物の気持ちが分かるからほっておけなくなり、それで汚れた仕事も嫌がらずに片付ける積極性や責任感を養い、労働の喜びを知ることになる。つまり子どもが動物と情を通わせて初めて、飼育体験が様々な世界と教育的効果を現すのであり、これは移動動物園などの単発的なふれあい教室では到底作れない環境といえる。

7は、丸い目とホワホワに毛のある哺乳類や、好きな人を見ると頭の羽毛を立て小首を傾げて羽をパタつかせて甘える小鳥にいえることで、「祝ただけで楽しくなる」との、動物が本来持っている特性である。これがぬいぐるみ人気の源であろう。

8は動物が子どもの心の内面の指標になるという意味である。子どもが感情を見て取れる種類の動物に辛く当たると、①その子の動物への感性が未熟 ②その子自身が虐待などのストレスを受けている ③脳の発達障害があるなどのいずれかであるとの考え方である。幼児期には動物を強くつかみ振り回すことも多々あるが、これは通過儀礼であり多くは直ぐに手加減を覚え動物を可愛がり庇うようになるが、言い聞かせても繰り返し弱い動物に辛く当たるとき、②や③かもしれない。特に③の場合、「行為障害」の症状の一つに「6ヶ月以内に動物虐待を繰り返す」がある (ICD=10)。そのような病気の場合、5・6歳から兆候が現れると言われており、周りの大人は、なるべく早期にあらゆる角度からこの病気の兆しを発見してケアする必要があるが、子どもの身近な動物は分かりやすい重要な指標の一つである。なお、FBIの心理捜査官は、連続レイプ殺人犯や連続殺人など凶悪犯の 78%はその成長段階で動物の目をつぶしたり、切り裂いたり殺したりした経歴

があつたと発表している。これにも、幼児期に動物をいじめた、オタマジャクシを針でつづつていた、水槽に毒を注いで苦しむ魚や親を見て喜んでいた、などの事例があるが、小さな子がこのような行為を何度も繰り返すときは、直ぐに親御さんと話合う方が良いだろう。



よその犬猫だが、1歳の子でも、数日で動物が嫌がらないように触ることを覚え、一緒に遊べるようになる

## 5 学齢による飼育体験教育のあり方

長年学校にかかわるものとして、また発達心理学や理科教育の専門家と話し合った結果、「情の通う飼育」を基本として飼育教育のあり方を下のように提言している。

○幼稚園：子どもたちが持ち込んでくる小動物を大事に飼育して、自然に対する畏敬の念を伝え、また生物界への視点を開く。また小さな哺乳類や愛玩鳥をクラスの近くで飼育する。

○1・2年生：(親しむ) 比較的いろいろものの垣根なく受け入れられるこの年齢の時に、哺乳類や愛玩鳥を飼うことは、将来の人生に深い影響を及ぼす。ごく自然に親しめるように教室内あるいはその近くで生活科として、身近な飼育を行う。この年齢の子は、飼育舎を管理することは無理である。しかし、この年齢の時に動物と親しむ体験しておかなければならない。

○3・4年生：(観察する、追求する) 飼育舎の飼育を1年間行う。3年の2学期から始めて、4年の2学期に3年生を指導しながら手渡すと良い。3年生は体力も感受性も強くなっています。外界に関する興味が広がるときである。飼育で動物に関わることで、道徳的や理科的な刺激を受け、心の豊かさを増やすと共に、科学的な刺激もうけて、広い世界を見ることができるだろう。

(巻末のモルモットの絵参照)

○5・6年生：(発展させる) それまでの学年で動物飼育に関わっていれば、高学年で関わることはない。実際にこの学年は忙しくなっており、いわゆる飼育に関わるには無理がある。教室内で小さなペットを飼う程度にとどめる。しかし、それまで体験した生物とのふれあいや世

話をもとに、たとえば魚などの解剖やチャボの卵の孵り方、体の構造と臓器の働き、野生動物と人の病気、公衆衛生の意味（衛生観念）、日本の生態系保護、動物園の意味、人のために働く動物たち、食料としての家畜など、そしてそれに関わる人々たちなど、様々な課題を見つけて追求できるだろう。

○中学から高校：教育とは別であるが、中学ではクラス内にペットがいるほうが、友人関係を改善し、気持ちが安定すると思われる。

## 6 動物を飼う際の注意点

情を培うための動物飼育の在り方についての注意点を記述する。

(1) 導入する動物の種類：感情が見て取れる小型哺乳類やチャボ（愛玩用鶴種）や文鳥などの愛玩鳥が、性格が良く抱くことができかつ世話が比較的楽で、子どもへの効果も高い。

時に、犬や猫が保育園や幼稚園で子どもとともに良い交流をしている事例も見られるが、犬猫は人と親密な動物で幼児並みの愛情を必要とするため、特にケアが必要である。可愛がっていた職員が辞めると不安定になり犬は攻撃的になったり、猫は家出したり病気になったりする例が多い。先生固有の犬を毎日連れてきて、子どもたちにふれあわせるなら良いだろう。

(2) 飼育数：世話が直ぐに終わって、ゆっくりと動物とのふれあいを楽しめるように、数を少数にとどめる。出産させるときは年に一度計画的に行い、里子に出す。飼育は一種類あるいは2種類にとどめ、動物がのんびりできるように、別々に一家族づつ生活させる。少数ならば治療も掃除などの管理も容易である。

(3) 扱い方：優しく扱わないとどんな動物でも、逃げ回ったり咬むようになる。決して追い



そっとえさを差し出す

かけないようにしゃがんでそっと餌を差し出すなど、動物を怖がらせないように接することを子どもに伝える事。なお大人の言葉で子どもが生涯動物を怖がるようになる事例が多いため、子どもの世界を失わせないためにも、動物を危険と教えないこと。子どもたちには「怖が

っているのは体の小さな動物のほう」だと、話して「動物も性格はいろいろであるが優しく接すれば、動物も怖がらないで優しくなる」と教えたい。

大事なのは、いつも「今、私たちがしてあげていることを動物はどう思っているか」を想像させることで、それが「他への共感」を培うだろう。

(4) 支援体制を作る：「子どもにとって大事な体験」と説明して保護者の理解を得て、休日の協力体制をつくること。それには地域の獣医師の協力を得て、科学的な説明や子どもへの影響などについて助言を得ると良いだろう。また、ふれあいの支援や、衛生上の不安なしに動物を維持するためにも、気軽に相談できる獣医師の支援体制は必要で、教員の負担を軽くする。

## 7 健康被害を受けないための注意

(1) 怪我：動物は自分から人を襲うことは殆どないが、危険を感じたり家族を守るために暴れるのは人と同じである。動物が健康な生活が送れるように、年に1～2度、主治獣医師に健康を見てもらしながら助言を受けると良い。もしも人が動物から傷を受けたときは、まず傷を良く水洗いをすること。傷を揉んで血がにじんだとき、「動物も怖かったんだね」と子どもに話しかけながら消毒すること。傷が深いときや血が止まらないなどの時は医師に受診のこと。人に咬まれても深い傷は化膿する。

なお、鶏は黒い点を虫と思って突付く習性があるため、鶏の顔と高さを同じにして見つめると目を突付かれる危険がある。間近でニラメッコしないように注意。また人を含めて、すべからく動物の口や鼻の前に指を突き出すと「食べ物？」と咬まれることがあるため、突き出さないように注意。

(2) 人と動物の共通感染症：現在の日本で、動物からうつった病気で死ぬ人は、毎年の若干名のエイズなどの免疫不全症の末期を除いては無いと報告され、マスコミが騒ぐほど動物から来る病気は問題になっていない。が、外国にはエボラ出血熱、狂犬病など怖い病気があるので、輸入動物また野性動物は家庭でも飼わないようにと、厚生労働省は指導している。特に狂犬病は毎年欧米を含めた全世界で推定3～5万人の人が死んでおり、病気を知っておくことが必要である。この病気は人を含んだすべての哺乳類と一部の鳥類がかかり、症状が現れたら全ての人が死ぬ怖い病気である。

学校で、子どもの傍に置く動物は、古くから日本で飼われていたごく一般的なチャボ、モル